

エッセイ特集1

病気・医療・看護とヴィクトリア朝文化

医学が文学に出会うとき —— サミュエル・ウォレンと医療小説の誕生

石塚 久郎

はじめに

いわゆる「医療小説」は19世紀の作家サミュエル・ウォレン (Samuel Warren, 1807-77) の『物故したある内科医の日記からの抜粋』 (*Passages from the Diary of a Late Physician, 1830-37*)¹ (以下『内科医の日記』) から始まる、というのが私の考えだ。2年前上梓した『病短編小説集』 (平凡社ライブラリー、2016) においてウォレンを日本で最初に紹介した際にこのことは既に述べたが (解説参照)、その時はたいした拠り所もないまま直感的に言ったに過ぎなかった。ドイルの医学小説集『ラウンド・ザ・レッドランプ』 (1894)² に連なる系譜があるのではないかと。その後、直感が確信に変わったので、この場を借りてこの仮説の補遺的作業を試みたい。

ここで一つ修正がある。『病短編小説集』の解説では「医学小説」という括りを用いた。これは現代の大衆文化に流通する、医療を扱った大衆文化群 (小説、漫画、TVドラマ、映画) と区別するためだ。エンターテインメント性の強い医療小説や医療ミステリーと19世紀の医学もの小説は性質からして違うのではないかと。しかし、今はこう考える。ウォレンの医学小説は現代の医療小説や医療漫画と連続、いや直結している。だからあえて医学小説とは呼ばずに医療小説と呼ぶことにする。

では、医療小説とは一体何なのか。英米ではA・J・クローニンからオリヴァー・サックス、日本では『白い巨塔』から『チーム・バチスタ』シリーズに至るまであまりにも幅広く、その一貫した定義は難しい。が、緩やかにこういえるかもしれない。医療を題材としたフィクション (あるいは物

語形式をとったノン・フィクション)で、医療従事者が作家の場合もあるが、そうでない場合も多く、医師ならびに医療従事者の生き方や価値観と倫理、患者との関係性に重きをおくもの(人道主義)、医療の在り方や社会的役割にメスを入れるもの(社会派)、エンターテインメント性を重視するもの(医療ミステリー)などがある。いずれの場合も医学的事象は本当らしさを基本とすることが多く、現在のアクチュアルな問題に根差したものが多い。(日本ではその人気は高く短期間ながら「日本医療小説大賞」なるものまで創設された。)ウォレンの『内科医の日記』は、あるべき医師の姿といった医療倫理の理想を内包しながらも、医学の症例譚をエンターテインメント性の強いリーダブルな小説に高めた最初の成功例として医療小説の起源といえる。

「文学と医学」研究

本題に入る前に「文学と医学」研究(Literature and Medicine studies)の動向に目を向けてみるのも無駄ではない。この分野のパイオニア的存在であり泰斗のG・S・ルソーが1981年にマニフェスト的論考³を発表して以来、特に90年代以降、様々な時代分野でソーススタディにとどまらない本格的な「文学と医学」研究が繰り広げられてきた。⁴(ちなみにこの翌年の1982年に専門誌『文学と医学』(*Literature and Medicine*)が創刊される。)ヴィクトリア時代も御多分に洩れず、コレラと公衆衛生、結核や梅毒といった疾病と文学の関係、精神疾患と文学、感染と文学、退化と優生学の問題、ゴシック小説と医学、症例と文学の関係など次々と研究がなされている。⁵最近ではこれにディスアビリティ研究(disability studies)が加わった。⁶2008年時点でのヴィクトリア時代の研究動向をまとめたものとしてピーター・M・ローガンによる有益なレビュー「25年後の文学と医学研究」がある。⁷25年後とはルソーのマニフェストからの年月を指している。ローガンはこのなかで精読や言語分析を得意とする文学研究と歴史記述を背景にもつ医学史研究との間で乗り越えることの難しい壁があるのではないかと、少なくとも一人の医学史家の文学研究への不信には耳を傾けるべきだと述べている。文学と医学の影響関係といいつつも、文学研究者は何かしらの医学の概念

や隠喩をメタナラティブ的に利用して文学作品を読み解くというスタイルを取りがちである。医学史側からしてみればそのような何でも説明可能なマスターナラティブは信頼するに値しない訳であって、勢い文学研究者の内輪向きの精読も医学史に寄与するところはない、ということになってしまう。⁸ 詳しくはローガンのレビューに譲るが、この問題を別の観点からいえば、ルソーが当初から指摘していた問題、医学から文学への方向性だけでなく文学から医学への方向性、つまり双方向性を考えないとこの分野は成り立たないということに突き当たる。そう、我々は文学が医学に出会う仕方は十分に知ってはいるが、医学が文学に出会う仕方はそうでもないのだ。⁹

もっともローガンの記事以降の進展もある。特筆すべきはミーガン・ケネディによる症例と文学との関係性の考察である。¹⁰ 医学の症例 (case history) というジャンルと文学の小説というジャンルがいかに絡まり合いながら18世紀から19世紀まで変遷したのかを見事に分析している。このなかでケネディはこう指摘する。一般人と専門家の距離が近かった近代初期から18世紀までの医療文化とは異なり、19世紀になると一般と専門の距離が大幅に広がり、更に科学と文芸といった二つの文化に分離していったというのがこれまでの理解だが、実はこの流れ自体ずっと複雑であって、文学は医学を利用し医学も文学を利用したのだ。¹¹ 詳細はケネディのブリリアントな論考に譲るが、ウォレンに関心のある私にとって最も刺激的だと思われるのは、当時爆発的な広がりを見せた定期刊行物が文学と医学との邂逅のプラットフォームを形成していたという点——医師も文人も同じスペースで執筆・読書活動を行っているのだから双方向性は必ずあろう——と、その定期刊行物のなかで医学と文学が邂逅した好例としてサミュエル・ウォレンの『内科医の日記』があったという点だ。『ブラックウッズ』(Blackwood's Edinburgh Magazine) でシリーズ化されたウォレンの医療もの短編を18世紀の「珍奇な症例」から19世紀の「興味深い症例」への変化と関連付けながら、それをケネディが提唱する「ゴシック医学」(Gothic Medicine) ——ゴシックのモード(語りの枠組み)を踏襲した医学のナラティブ——の系譜に位置付ける。忘れ去られた流行作家ウォレンの本格的再評価はここでなされる。¹²

より最近ではミーガン・コイヤーがスコットランドの保守的^{トール}の定期刊行物『ブラックウッズ』で初期に活躍した「医師－作家」(doctor-writers)らの大衆医療ものを分析し、進歩主義^{ドクト}的で功利主義的な医科学に反動的であった彼らが現代の医療人道主義 (medical humanism) の起源ともいえるモデルを作ったと指摘する。¹³ そのなかの一人ウォレンの「内科医」は医学版「感情の人」(medical man of feeling) を体現するテンプレートとなったとしてコイヤーはウォレンを高く評価する。つまり、私が日本でウォレンを発掘したとほくそ笑んでいる時に海の向こうでは医学が文学と出会う格好のケースとしてウォレンの医療小説の再評価が進んでいた訳である。

サミュエル・ウォレン

では、ウォレンとはいったい何者なのか、その代表作『内科医の日記』とはいかなるものなのか。サミュエル・ウォレンはウェールズのデンビシャーに1807年、ウェスリー派の牧師の子として生まる。詳しいバイオグラフィは書かれていないので、彼がどのようにして医学と出会ったのかは分からない。が、1821年から27年にかけての約6年間は医学の修業をしていたようだ。一説には薬剤師の徒弟として働いていたという。『内科医の日記』のリアルで詳細な臨床医療の記述はある程度この時の経験がもとになっていると推測される。その後、1827年から28年にかけてエディンバラ大学で法律や古典(医学もか)を学ぶかたわら、文芸活動にも励んでいたようで、大学主催の詩のコンペで賞をもらっている。もっとも文芸活動は医学の修業時代から始めており、17歳の時に大胆にもウォルター・スコットに出版のアドバイスを請う手紙を出している。エディンバラ大学時代にド・クインシーや『ブラックウッズ』の編集を手掛けるジョン・ウィルソンに出会ったとされる。28年にロンドンに出てからは医学の道へは進まず、法曹学院の一員となり37年に法廷弁護士となって活躍する。文筆家としての転機は1830年にやってくる。その年の8月『ブラックウッズ』に彼の最初の医療短編が匿名で掲載されヒット。その後37年7月まで掲載され続ける人気シリーズとなり、人気流行作家の仲間入りを果たした。今ではすっかり忘れ去られた作家ウォレンだが、一時期は、かのディケンズの

人気を凌ぐほどの勢いをもっていた。その人気はイギリスだけにとどまらずアメリカ、フランス、ドイツにまで及び、短編をまとめた最初の書籍は1831年という早い時期に(恐らく無許可で)アメリカから出されている。¹⁴ 正式なエディションはブラックウッズから『内科医の日記』として3巻本で1832年～38年にかけて出版され、19世紀を通じて版を重ねた。執筆活動を継続するも残念ながら医学ものはこれが最初で最後となり、40年代にベストセラーとなる小説は法律もの(legal novel)となった。51年に発表した長編詩が大失敗したこともあり、50年代以降は急速に人気に陰りを見せ、同時に文筆活動も影をひそめる。56年から59年までトーリーの下院議員となり、その後59年からは77年に死去するまで心神耗弱の犯罪者を審査する補助裁判官として従事した。¹⁵ これがサミュエル・ウォレンの生涯のあらましである。

『ブラックウッズ』とウォレン

では、爆発的な成功を収めた『内科医の日記』とはどのような作品なのか、その人気の秘密とともに見てみよう。『内科医の日記』シリーズは、ある物故した内科医の日記を匿名の作者が編者となって、内輪だけが知っている「秘密の話」(“secret history”)を詮索好きな読者に垣間見させるという覗き趣味的体裁をとっている。¹⁶ 多くの専門職が文芸を通してその世界を開示しているのに、医学の世界だけが及び腰であるのはおかしい、ならば「私」(編者)がお目につけようという訳だ。開業の苦労話に始まり、乳癌切除手術、結核、梅毒、ヒポコンデリー、冷え(風邪)といった典型的な医学症例から、幻覚とも幽霊とも判断がつかない疑似医療幽霊譚や詐欺師や娼婦の話まで題材が多彩であるうえに、感傷ありコメディあり恐怖ありリアリズムありと語りも非常に巧みである。自らの医療経験を惜しげもなく創作につき込んだと推測されるが、その自前のネタも尽きたのだろう、後半になればなるほど一つのネタで話を引き延ばす傾向が強くなり、短編よりも中編が多くなる。そのせいか、シリーズ後半はやや面白みに欠ける面もある。とまれ、このシリーズは大うけする。

『内科医の日記』のヒットの秘密は『ブラックウッズ』という媒体にあっ

たのかもしれない。匿名の作家による編集という体裁は事実と虚構とを曖昧にするが、これは『ブラックウッズ』が得意にしていた騙しのテクニクである。しかも、臨床医学的記述があまりに正確で真実味を帯びているので、多くの読者は内科医の日記が本物であり、現実の体験から切り取られたものと勘違いした。実際、アメリカで出された『内科医の日記』の反響としてそれが「現実生活からとられたスケッチ」であることが評価されている。¹⁷ 推定作者として『ブラックウッズ』に大衆医療ものを寄稿していたデイヴィッド・マクベス・モイアや当代の名医マシュー・ベイリーの名まであがっていたのもいかにこの作品が本物らしかったかの証左となる。¹⁸ ウォレンが作者であることを明かしたのは1838年のエディションにおいてであるから、その時までこの日記が虚構なのか現実のものなのか判断がつかず、現実のものとして読んだ読者も多かったに違いない。こうして現実と虚構の境界を極限まで曖昧化させ、専門家しか知らない秘密の(内輪の)世界を一般向けに暴露するという試みは大成功を収める。もちろん、こうした試みは医師稼業に限ったことではなく、弁護士や判事、監獄の牧師など様々な回想録や日記が出回り人気を博していたので、ウォレンはこの潮流に乗ったといえる。¹⁹ しかもウォレンがこの医師ものの最初の作家でもないのだ。実は、ウォレン以前に同じ形式で書かれた本が少なくとも一つある。1829年に『内科医の話』がW・H・ハリソンによって書かれている。²⁰ ハリソンの医師ものは全く売れなかったというわけではないものの、²¹ このジャンルでの初めての成功はウォレンを待たなければならない。

『ブラックウッズ』が成功を保証していた点はもっとある。『ブラックウッズ』の「恐怖もの」(tales of terror)はその扇情性によって読者の心を驚ばかみにしていたが、人気を博したのは話が単に恐ろしいというだけでなく、臨床(医学)的眼差しに比する科学的で正確な描写やディテール、当人に起こった恐ろしい出来事がどんなトラウマ的・心身の効果をもたらしたのかを本人が語るという語り形式(一人称の語り)にあった。²² 特に、医科学の論文と文芸のテキストが同居するばかりか相互に干渉していた初期『ブラックウッズ』の空間では、「恐怖もの」の多くは医学の症例と似た形式を踏み、非日常的(病理的)な出来事は一人称で語られ、トラウマ的体験はヴィヴィッドにドラマティックに描かれた。²³ 一方、医師は作家となり(「医

師－作家) 大衆向けに医学の新しい情報をいわば「文学的」に語る。例えば、医師－作家のひとりロバート・マクニッシュの『酩酊の解剖』(1827)は、酩酊の主體的様態を現象学的に詳細に、しかも比喩的言語を駆使して鮮明に描いてみせた。これは、トマス・トロッターの有名な医学的酩酊論(1807)に見られる客観的記述とは性質を異にするものであり、「恐怖もの」の修辞効果にも似ている。²⁴『ブラックウッズ』はこのような異種混合的なジャンルである「大衆医療もの」(medico-popular writing)でも人気を博していたのだ。とすれば、医師の名を借り本物と見紛うばかりの「症例」の数々を文学的比喩言語で彩り、退屈になりがちなお堅い医学症例をエンターテインメント性にまで高めたウォレンの『内科医の日記』シリーズが受けない訳はない。『内科医の日記』は医学症例をベースにしつつも、内容的には狂気に幽霊譚、墓泥棒に詐欺師、ギャンブルに誘惑、決闘に殺人、自殺に家庭内暴力などゴシックの主題が満載であり読者を飽きさせない。扇情的でグラフィック、感傷的でメロドラマティックな語りと臨床医学的リアリズムとをうまく融合させることによって『内科医の日記』は絶大な人気を得、その後の医学ものに決定的な影響を及ぼすことになる。

人情味のある医師、探偵のような医師

匿名性による真実と虚構との曖昧化、覗き見趣味的内輪話の暴露、ゴシック医学的要素と臨床医学的要素の融合といった要素以外にもヒットの要因はある。先に言及した「感情の医師」——患者の苦しみに共感し時に涙する医師——たる『内科医の日記』の語り手の姿である。現代の大衆「医療小説」文化へのつながりを考える場合、この点は重要である。というのも、コイヤーが述べるように、現代につらなる人道主義的な医師像は普遍的なものではなく、歴史のある時点に形成されたといえるからだ。詳しくはコイヤーおよびマカローに譲るが、²⁵ 医科学の急激な発展がもたらす医療行為の非人間化に歯止めをかけるため、医療人文学(Medical Humanities)が求める人道主義的医師——パソコンの画面だけでなく患者の声と話しにしっかりと耳を傾け、患者の苦しみに共感できる医師——の起源はスコットランド18世紀の医師－作家ジョン・グレゴリーの医療倫理を自家薬籠中のも

のとした『ブラックウッズ』の大衆医師－作家らに辿ることができる。19世紀前半はちょうど『フランケンシュタイン』に見られるように、ボディスマッチャーたる医科学者がマッド・サイエンティストという負の烙印を押されるようになり、その反動として肯定的な集団的アイデンティティが模索されている時期だった。そこでグレゴリーの医療倫理に基づく人道主義的な、道徳的で人情味のある医師像が、分離しつつあった理性(医科学)と感情(文芸)とを和解させるためにも求められたのである。²⁶『内科医の日記』の語り手の医師はまさに、この人道主義的医師像を具現しモデルとなったとコイヤーはいう。感傷主義的モードによる粹取りは前述のゴシック調の語りとは馬が合わないようにも見えるが、以下に述べるようにウォレンの真骨頂はまさに異種混合の妙にある。

ウォレンの内科医(=語り手)が「白い巨塔」に住まう超合理的で功利主義的な医師ではなく、読者と視線を共有できる腰の低い人間味あふれる医師であることは、まさに第一作目の「藁をもつかむ」(“Early Struggles”)で明示される。野心をもってロンドンに上京した若き内科医(「私」)が開業したものの上流階級との頼れるコネもなく困窮にもがき苦しむ情けない姿がここで曝される。文字通りの題名は「若き日の奮闘」だが内科医がまさに藁をつかむ思いで苦境をкаろうじて凌いではまだ窮地に陥る様(すんでのところでは監獄行きを免れる)は、内科医といえども開業医となれば一般の人と同じではないかと、読者の同情をかう仕掛けとなっている。

大体の内容はこうだ。内科医の「私」は26歳で妻帯者。名門ケンブリッジ大学を卒業後ロンドンで開業するも閑古鳥、出世払いを見込んで3千ポンドの借金をするが定期的な利息の支払いに汲々とし夜も眠れない日が続く。それではと医学の専門書であてようと額に汗して書いた原稿を書籍商に持ち込むが、けんもほろろに断られ、店を出たとたん悲しみの悔し涙がどっと湧き出る。大声で泣き叫びたくなるくらいだ。気を取り直して別の書籍商に足を運ぶがこれも無駄足となり、絶望した内科医は原稿を火にくべようとする。が、妻に拾い上げられ慰められる。妻のエミリーはけなげに献身的に夫を支える理想の伴侶で、この妻の陰ながらの支えと慰めがなければ内科医の心はとうに折れていたに違いない。(シリーズを通して妻の献身的な愛情はそうではない女性との対比として使われる。)今度はケ

ンブリッジ時代の古典の素養を生かして古典の家庭教師を試みるが一月で用なしに。(それもひどい扱いで)。そうこうするうちに、半年の利息を払う日が近づき、不安で健康も下降し、借金があるということで近所の評判も落ち、気分も落ちる。そんな暗澹たる気分のなか通りがかりの兵士たちの意気揚々たる楽し気な姿がふと目に入る。自分の今の境遇との違いに、とめどなく流れる涙を抑えることができない。そんな時、偶然助けることになったある老紳士に医療上の助言を与えることでついにチャンスが舞い込む。これでようやく上流階級とのコネができ生活も安泰かと思いきや……。と、ここまでもはらはらものなのだが、話はまだ半分を過ぎたところで成功を掴むまでにまだ一波乱、二波乱が待っており、読者を飽きさせない展開だ。²⁷ このように語り手を同情する側(上からの目線)ではなく、同情される側に最初に置くことでウォレンは人情味の医師たる人物像を作り上げる。

とはいえ、ウォレンの内科医は単に人情味のある医師であるだけではない。というのも、『内科医の日記』の医師はあたかも探偵が事件の謎を解くように、より抑制のきいた感受性センシビリティとそれに反比例するかのような鋭いセンス理性(観察眼)をもって患者を観察しその病状を診断するからだ。18世紀の感情の人には決してこのような臨床医学的な眼差しはない。例えば、1巻4章の「死の床にある学者」(“A Scholar’s Deathbed”)を見てみよう。これはある若い不遇の古典学者が過度の研究がたたり奔馬性結核で死ぬ話だ。内科医は人情味のある医師として、才能豊かな若き古典学者の不遇な身の上で自分自身の過去の姿を重ね合わせ深く共感し涙する。自分の原稿を書籍商に持ち込むも無下に断られるところなどは自分そっくりではないかと。とはいえ、このような感傷主義のモードだけで肺病やみの学者の死を看取る訳ではない。臨終の場面の描写は事細かに描かれているが、医学的リアリズムも忘れない。病人がシーツを掴んだり空を掴んだりする仕草は死の間際の徴候といわれるがそれは迷信に過ぎず、わざわざ注にチャールズ・ベル博士の証言を引用し、その行為が単に飛蚊症によるもののだとして、過度の感傷主義に医学的リアリズムで水を差す。更に、この若き学者が研究に没頭するあまり病的な感受性を持ち、融通の利かない頑固さと傲慢な気質を持っていることを探偵のような鋭い観察眼でしっかり見抜く。死に面

しても牧師を拒む学究者の不信心は究極のところでは内科医の道徳（ひいては中流階級の道徳）に抵触するのだ。

極めて保守的でドメスティックな価値観を内在させつつ、探偵並みの鋭い観察眼を働かせ、その価値観にそぐわない人物の悪しき行為を「発見」し、その人物が罰せられることで読者に教訓をもたらすという手法はウォレン得意のパターンである。1巻13章の「化粧室での死」(“Death at the Toilet”)でもこの鑑識眼が光っている。これは、ある未亡人の病弱な一人娘シャーロットが、医師の助言と母親の懇願を無視してどうしても夜の舞踏会に行きたいときかず、化粧室で出かける準備をしている最中に突然死する話だ。わがまま娘の死の描写はヴィヴィッドでかつ微に入り細を穿ったものであり、読者にここぞとばかりに衝撃を与えようとする手法はウォレン特有の異化効果——臨床医学的なりアリズムがゴシックとうまく合体することによって知覚が引き延ばされる修辞効果——とっていい。シャーロットの死に顔はいかにもおどろおどろしい。顔は姿見に向けられ、ろうそくの灯りの反射で恐ろしい顔が忠実に鏡に映りだされているが、顎は半分下がり目は冷たく見開かれて鏡を見つめたままだ。更に、内科医の観察眼は死に顔に自己満足と欺瞞の作り笑いの痕跡が隠されているのを見逃さない(“detected the traces of a smirk”)。²⁸ 自分はこれまで何百という死姿を目にしているが、これほどまでに虚栄心にまみれた胸を悪くするような見苦しい死体は見たことがない、とって読者に悪しき行為をもたらす恐ろしい結末を教訓として提示する。

混成調の妙——ウォレンのストーリーテリング

このようにウォレンの『内科医の日記』は、シリーズを通して個々の作品別に様々なことなるモード(感傷主義、ゴシック、コメディ、リアリズム等)が使用されているだけでなく、一作品のなかで複数のモードが混成する作りとなっているのが特徴である。そのなかの一つを取り出して、ケネディのようにゴシックを強調するのも、コイヤーのように感傷・人道主義を強調するのも、ワージントンのように探偵小説の萌芽を見るのも、²⁹ 間違いではない。しかし、ウォレンのストーリーテリングを特徴づけるのは混成

調の妙といったものではなかろうか。混成調とはポオが『ブラックウッズ』をこけにする際に使用したものだが、³⁰ここでは肯定的に逆用しよう。恐怖をもたらすゴシック、スリリングな展開をもたらす扇情主義(センセーションナリズム)、涙をそそる感傷主義、笑いを誘うコメディ、真実らしさを醸し出すリアリズム、教訓を訓示するモラリズム、謎解きの面白さを引き出すディテクティブ・モード(疑似探偵モード)、出来事の心的影響を一人称で語るトラウマのモード、といった様々なモードが一見雑に、しかしよく見ると巧妙に混成されている。(ここにストーリーテリングのうまさが加わる。)以下に見るように、ウォレンの中で混成していたものが、19世紀を通じて分化していくつかの系譜に派生していったというのが本当のところだろう。

混成調の妙の好例として3巻1章の「雷に打たれて——拳闘家」(“The Thunder-Struck — The Boxer”)を見てみよう。これは医学的にはカタレプシー(catalepsy)の症例である(医学的リアリズム)。とある年の7月10日の火曜にこの世が終わるという不吉な予言が跋扈し、世間はその噂で持ち切り。その予兆となるかのように暗雲立ち込める不穏な空模様(ゴシック調)。内科医の家にはその日、可憐なアグネス・P嬢が訪れていた。21になるP嬢は女らしさの具現とっていいほどの物腰の柔らかさと感情の優しさを持ち合わせていた。内科医がこの日記を書こうと部屋にもどると突然、雷が家のすぐ近くに落ち、驚愕した内科医は石のように硬直する。急いでP嬢がいる2階にかけ上がると、なんとP嬢は硬直したままピクリともせず、その美しい姿のままただただ直立不動の姿勢を保っていた。ここからの事細かな(異化作用的)P嬢の描写は医学的リアリズムとゴシックをうまくブレンドしたものとなっている。更にこの恐ろしい姿(息をするだけの大理石のような女性)を見た「私」の心的トラウマ——話そうとしても声がでない、自分が見たもののように唇が硬直してしまい、目も閉ざされ、意識が遠のいてついには気絶してしまう——の記述も忘れない。意識を取り戻しP嬢をじっくり検分すると、今まで見たことのないこの症状がカタレプシーだと判明する(謎解きの探偵モード)。ファン・スイーテンやウィリアム・カレンといった過去の医学の権威者からの引用、現代の医師による似たような症例の数々をもちだし(医学的リアリズム)、この病は特にヒステリー

の家系の女性に多いことを述べる(医学的神話)。途中、拳闘家の短い挿話が差し込まれるが、これは悪名高い拳闘家が同じように雷の影響で盲目になり動けなくなった話で、悪態をつく拳闘家の無様な姿(こうなったのはこの男の悪行のせい)と美しくも悲劇的なP嬢(彼女に何の責任もない)の姿とを対比させるためだ(教訓のモラリズム)。話が長くなるので端折るが、この後ガルバニズムによる電気ショック療法や音楽療法なども試される(ここでも医学のリアリズムとゴシックが合体される)。婚約者のN氏も遅ればせながら到着するもP嬢の無残な姿を目にして脳炎の徴候を見せるほどに。後は死を待つばかりとなったが、奇跡的にP嬢の目が開くと鼻と口から血を流し(臨床的リアリズム)意識を取り戻す。徐々に回復する姿を見て内科医の「私」は涙し、その涙が彼女の頬にしたたり落ちるのを感じて、彼女も涙し唇を震わせる(感傷主義)。しかしこれでハッピーエンドとはいかず、P嬢はここに居るのを知らされていない婚約者をあたかも居ることを知っているかのようにしつこく呼ぶのだが……(扇情主義)。と最後は読んでのお楽しみだが、様々なモードがうまく混成している様子が分かる。ウォレンの『内科医の日記』がこれほどまでに読者を飽きさせず、その心を惹きつけ続けたのはこのような混成調の妙にあったといえる。

影響と遺産——医療小説の誕生

このように、もともと物語性と珍奇さを内包していた医学の症例というジャンルを様々な修辞モード(特にゴシックと感傷主義)で塗りこみ、それを一般読者に開かれた医学譚として鋳直し、虚構(文学)と現実(医学)とを曖昧化させながら、「恐怖もの」や「大衆医療もの」が先例としてあった『ブラックウッズ』という医学と文学が干渉し合う空間に投げ込まれることで、ウォレンの医療小説は生まれた。遡及的に見てウォレンの『内科医の日記』がいわゆる医療小説の起源と考えられるのは、この作品が及ぼした影響の大きさからである。

『内科医の日記』の影響がどれほど大きかったかは、シリーズ化されたとともに模倣が始まったことから伺える。パロディあり剽窃あり、そのほとんどが二番煎じでウォレンの面白さには及ばないのだがとにかく「医師の

日記」ものは大流行りする。『ニュー・マンスリー』には「物故した人気の薬剤師の日記からの抜粋」(1831)やアンソニー・トッド・トムソンによる「ある内科医のノートからのスケッチ」(1839)、ロバート・ダグラス「医学生スの回想」(1841)などタイトルからして模倣と分かる作品が掲載され、アメリカでは『あるロンドンの内科医の日記』がなんとサミュエル・C・ウォレンの名で出される(しかもセカンド・シリーズまで)。³¹ L・F・C編による『ある現役内科医の日記からの抜粋』(1851)は物故した内科医ではなく現役の内科医であることを売りにした二番煎じだ。そのなかの短編「手に負えなくて」(“The Incurable”)はうら若きシャーロット嬢が見るからにやつれていくので結核かと思いきや実は恋煩い(結婚を約束していた彼がインドから帰ってくるが運命の悪戯により他の女と結婚)であったという話だが、ウォレンのストーリーテリングの足元にも及ばない。³² 医師-作家による模倣も多い。³³

しかしその影響は単なる模倣と流行にとどまらない。ウォレンのなかに内在していた混成モードは分派し主に二つの大きな流れとなる。一つは前述の人道主義的医師の系譜であり、これはコイヤーによって明らかにされている。『ブラックウッズ』の医師-作家らに始まり世紀中葉のスコットランドの医師ジョン・ブラウンの「ラブとその仲間」(1858)を經由して世紀末のスコットランド「医療菜園派」たる医師-作家イアン・マクラレンの『昔ながらの医師』(1895)に連綿と流れる人情味の医師ものである。³⁴ 医師-作家が総じていうように、「人間性」(human nature)を誰よりも知っている専門職が医師に他ならない。牧師に代わって臨終の場に立ち会うことになる医師こそが人間の弱さや陰の部分に分け入り、他人に明かされない個人の秘密や内面を覗き込むことができる唯一の職業なのだ。ウォレンも「序」で説明するように医師こそが「人間性の最も秘められた深遠なる知識へ至る道」を開示することができる。³⁵ 功利主義的な動機でも功名心でもなく、患者の話や苦しみに心を動かされ行動する無私無欲の医師の理想的なあり様は、ダイレクトに現代の医療人文学や大衆医療小説とつながっている。

もう一つの大きな流れはゴシック系である。これはダイレクトにウォレンの医療譚がコリンズやレ・ファニユらの医療ゴシックものに材料を提供

していることはもちろん、世紀末の「医療探偵小説」というサブジャンルの創生につながっていることから分かる。ウォレンの短編は「症例」という形式を踏んだ医師による疑似探偵ものといえるのであって、ワージントンがいうように探偵小説の源泉の一つとなった。³⁶ 探偵小説でも世紀末には医師が探偵役を兼ねる医療ミステリーが流行り、ドイルはもちろんそのライバルとされた女性大衆作家L・T・ミードの医療ミステリーは大いに人気を博した。³⁷ 『ストランド』に掲載された『ある医師の日記からの話』(*Stories from the Diary of a Doctor, 1893-95*)はそのタイトルからしてウォレンの「医師の日記」ものの系譜にある。この系譜の伝統ののっとり話は「現実の医療を子細に観察した」結果もたらされたものであり、いくつかの物語は「実際の経験」によるものであることが予示される。³⁸ もっともこの著はミードの単独ではなく、ロンドン警視庁の警察医エドガー・ポーモント(ペンネームはクリフォード・ハリファックス)との共作という形をとっている。つまり、実際の医療の経験はこのハリファックスによるものであり、主人公の探偵役も同名のハリファックス医師が担っている。

もちろんこうした二つの系譜に収まりきれない医療ものも多数ある。というか、はっきりとジャンル分けできるものよりも、その方が多いのではなかろうか。例えば、ウォレン以降の医師ものの最良のものとするドイルの『ラウンド・ザ・レッドランプ』は医療にまつわる日常をユーモアありホラーありロマンスありと多彩な手法で描いている。(副題は「医療の日常の事実とファンシー」である。)ドイルが間違いなくウォレンを意識していたのは、この作品集の一つ「医師の記録」の冒頭でドイルがさりげなくウォレンを「医師の経験を誰よりもうまく記録したもの」として言及していることから分かる。³⁹

別の観点から、もう一つ大きな流れと思えるものが、第一の流れと合流する形で特に世紀末から20世紀初めにかけて形成されたのではないかと思われる。それは医学教育のなかにおける医療もの文学の活用である。全体像の把握には詳しい研究を待たなければならないが、この時期、医学生や医師の医療人文教育のために文学が利用されつつあったように見える。その糸口はアメリカで1904年から1906年にかけて発刊された「医師のレクリエーション・シリーズ」全12巻に見られる。⁴⁰ これは詩人・批評家・編

集者のチャールズ・ウェルズ・モルトンの監修による、医師のための文芸大全のようなものだ。第1巻は『医師の有閑——医師と患者にとって興味深い事実とファンシー』と題され、様々な雑誌や文人からの医療ものの抜粋によって構成されている。有名どころでいえば、ジェローム・K・ジェロームの『ボートの3人男』や医師-作家S・ウィアー・ミッチェルなどである。2巻目は『医師のレッドランプ——医師の日常生活に関する短編集』と題されて、1巻と同様に有名無名の作家からの抜粋が収められている。二つの巻のタイトルから分かるように、ドイルの『レッドランプ』が念頭にあるのは確かだ。その証拠に2巻目にはドイルの「ホイランドの医師」が収録されている。なぜ詩人であるモルトンがこの医療文学大全を手掛けるようになったのかは定かではないが、目的が娯楽であろうと教育であろうと医師向けに作られたことは間違いない。娯楽(レクリエーション)と名打っているのだから、医師稼業にある人が有閑に読むためのものとして出されたのかもしれない。しかし、近年の医療人文学と同様に、文学に親しむことで医療従事者が医療人道主義の精神を涵養することが目論まれていたとも推察される。さて、ウォレンはどこにあるのかといえば、編集された『内科医の日記』が6巻目に丸ごと収められている。ウォレンの重要性を見てきた我々にとってこの破格の扱いはなんら不思議ではない。「文人としての医師」(physician as a man of letters)という伝統——医学と文学との邂逅——は18世紀ですたれた訳でも、医療技術の行き過ぎに対する不信感と反発から医療人文学という形で現代に突然蘇った訳でもなく、19世紀から連綿と継続していたのである。

このように、ウォレンの『内科医の日記』から様々な医学文学の系譜が形成されていった。その潮流は21世紀の現代医療文化にも受け継がれている。昨今の医療人文学は医学教育と医療制度における文学の役割を更に前に押し進めようとしている。⁴¹ 文学を医療分野に応用しようと「応用言語学」ならぬ「応用文学」なる概念まで登場している。⁴² 恐らく、現代の大衆文化における医療メディア文化(医療系の小説、映画、漫画、TV)の興隆は、エンターテインメント性を帯びながらも、このような学問の流れとパラレルである。人道主義からミステリーまで幅はあるものの、確固たる「医療もの」文学の系譜を作ったウォレンの『内科医の日記』は、ポオが

探偵小説の生みの親であるのと同じような意味において、医療小説というジャンルの起源といえるのではないだろうか。

注

- 1 Samuel Warren, *Passages from the Diary of a Late Physician*, 5th ed., 3vols. (London, 1838). 以下引用はこの版による。
- 2 Alvin E. Rodin and Jack D. Key ed., *Conan Doyle's Tales of Medical Humanism and Values: Round the Red Lamp* (Florida: Krieger, 1992).
- 3 G. S. Rousseau, "Literature and Medicine: The State of the Field," *Isis* 72(1981): 406-24.
- 4 最新の研究動向と成果はケンブリッジ大学出版局から刊行予定の2巻本にまとめられる予定である。Clark Lawlor ed., *Literature and Medicine: The Eighteenth Century*; Andrew Mangham ed., *Literature and Medicine: The Nineteenth Century* (Cambridge: Cambridge UP, forthcoming).
- 5 例えば、Katherine Byrne, *Tuberculosis and the Victorian Literary Imagination* (Cambridge: Cambridge UP, 2011); Maria H. Frawley, *Invalidism and Identity in Nineteenth-Century Britain* (Chicago: U of Chicago P, 2004); Lilian R. Furst ed., *Medical Progress and Social Reality: A Reader in Nineteenth-Century Medicine and Literature* (New York: State U of New York P, 2000); Jane Wood, *Passion and Pathology in Victorian Fiction* (Oxford: Oxford UP, 2001).
- 6 例えば、David Bolt et al., ed., *The Madwoman and the Blindman: Jane Eyre, Discourse, Disability* (Columbus: Ohio State UP, 2012).
- 7 Peter Melville Logan, "Literature and Medicine: Twenty-Five Years Later," *Literature Compass* 5(2008): 1-17.
- 8 Ibid., 10. 一人の医学史家とはRoger Cooterである。
- 9 提言しておきながらルソー自身はロイ・ポーターとの蜜月以外はこの問題を突き詰めてきたとは言えない。それにポーターとの共作である『痛風——貴族の病』(*Gout: The Patrician Malady*, Yale UP, 1998)は医学史のパートをポーターが文化史のパートをルソーが棲み分けのように分担しているに過ぎない。
- 10 Meegan Kennedy, *Revising the Clinic: Vision and Representation in Victorian Medical Narrative and the Novel* (Columbus: Ohio State UP, 2010).
- 11 See also Meegan Kennedy, "The Victorian Novel and Medicine," in *The Oxford Handbook of the Victorian Novel*, ed. Kisa Rodensky (Oxford: Oxford UP, 2013). 医学史のなかでも「症例」を文学的に読もうとする試みはある。Gianna

- Pomataの一連の論考と『文学と医学』2014年32巻の特集「ジャンルとしての医学症例」を見よ。
- 12 Meegan Kennedy, “The Ghost in the Clinic: Gothic Medicine and Curious Fiction in Samuel Warren’s *Diary of a Late Physician*,” *Victorian Literature and Culture* 32 (2004): 327–51.
 - 13 Megan Coyer, *Literature and Medicine in the Nineteenth-Century Periodical Press: Blackwood’s Edinburgh Magazine, 1817–1858* (Edinburgh: Edinburgh UP, 2017).
 - 14 Anon., *Affecting Scenes; Being Passages from the Diary of a Physician*, 2vols. (New York, 1831).
 - 15 Bege K. Bowers, “Samuel Warren,” *Dictionary of Literary Biography*, vol. 190 (Detroit: Gale Research, 1998). 『内科医の日記』5版(1838)の序文(Preface)も参照。
 - 16 Warren, vol. 1, “Introduction,” ix.
 - 17 Vol. 2, Advertisement.
 - 18 Coyer, 132–33. ウォレンも折に触れこれが実生活のものであることを示唆する。
 - 19 Heather Worthington, *The Rise of the Detective in Early Nineteenth-Century Popular Fiction* (Basingstoke: Palgrave, 2005), 50. See also Coyer.
 - 20 ウォレンの『日記』の仏訳の作者名がなんとこのハリソンに間違われている。
 - 21 W. H. Harrison, *Tales of a Physician* (London, 1829). その証拠に1831年に第2シリーズが出版されている。
 - 22 Coyer, ch.2; Robert Morrison and Chris Baldick ed., *Tales of Terror from Blackwood’s Magazine* (Oxford: Oxford UP, 1995), “Introduction,” xv.
 - 23 Coyer, *ibid.*
 - 24 *Ibid.*, 38–9. 本物の医学の症例とみなされていたド・クインシーの『阿片常使用者の告白』が先駆者ともいえる。 *Ibid.*, 40.
 - 25 Coyer; Laurence B. McCullough, *John Gregory and the Invention of Professional Medical Ethics and the Profession of Medicine* (Dordrecht: Kluwer, 1998).
 - 26 Coyer, *passim*. なお人道主義(humanism)は人文主義的でもある。医師は古典(ラテン語、ギリシア語)や広く文芸に通じている必要もあった。それは単に博学で立派だからではなく、人文教養を通じて心の涵養が目指されたのだ。
 - 27 開業医の苦労話は小説になる。ドイルの『スターク・モンローからの手紙』(1895)という書簡小説はドイルの自伝的小説であり、若き日のドイルがいかに開業医として苦労したかが描かれている。『ラウンド・ザ・レッドランプ』の「つまづいた第一歩」も同様の話である。
 - 28 Warren, vol. 1, 258.

- 29 Worthington, ch.2.
- 30 ポオ『『ブラックウッド』誌流の作品の書き方/ある苦境』『黄金虫・アッシャー家の崩壊他9篇』八木敏雄訳(岩波文庫、2006)。
- 31 作者名のところに author of “Ten Thousand A-Year” etc とあるのでCというミドルネームがつくもののウォレンが書いたものと偽っている。
- 32 *Extracts from the Diary of a Living Physician*, edited by L.F.C. (London, 1851).
- 33 例えば、J. Slade, M. D., *Alice Glynn: A Tale, from the Diary of a Physician* (London, 1845).
- 34 John Brown, “Rab and his Friends,” in *Horae Subsecivae: Locke and Sydenham with Other Occasional Papers* (Edinburgh, 1858), Ian Maclaren, *The Doctor of the Old School* (Edinburgh, 1895); Coyer; 医療菜園派については Coyer, “The Medical Kailyard,” *The Bottle Imp* 15(2014) <https://www.thebottleimp.org.uk/2014/06/the-medical-kailyard/> 参照。
- 35 Warren, “Introduction,” x.
- 36 Worthington, ch.2.
- 37 ミードの医療ミステリーに関しては以下を見よ。Janis Dawson, “Rivaling Conan Doyle: L. T. Meade’s Medical Mysteries, New Woman Criminals, and Literary Celebrity at the Victorian *Fin de Siècle*,” *English Literature in Transition, 1880-1920* 58 (2015): 54-72.
- 38 L. T. Meade and Clifford Halifax, M. D., *Stories from the Diary of a Doctor*, first series (London, 1894), n.p.
- 39 Rodin and Key, 201, 214.
- 40 Charles Wells Moulton ed., *Doctor’s Recreation Series*, 12vols (Chicago: Saalfield Publishing Co., 1904-07)
- 41 医療人文学系も含む「文学と医学」研究の最新の論集としては以下を見よ。Stephanie M. Hilger ed., *New Directions in Literature and Medicine Studies* (London: Palgrave, 2017).
- 42 これは医療人文学が発展した「健康人文学」(Health Humanities)の分野で見られる。Paul Crawford et al., *Health Humanities* (Basingstoke: Palgrave, 2015), ch.3.

——専修大学教授